

会津少年白虎隊士の殉難とその埋葬

今井 昭彦

目 次

1. はじめに
2. 少年白虎隊士の出陣と自刃
3. 少年白虎隊士埋葬の経緯
4. むすび

1. はじめに

幕末維新期において、近代日本の歩むべき方向性を決定づけた会津戊辰戦役における戦死者祭祀については、その概況はすでに報告している⁽¹⁾。周知の如く、「戊辰戦役朝敵の巨魁」と目され、「賊軍」の代名詞ともなった奥州会津藩23万石（家門、実高約70万石）は、薩長ら新政府軍の侵攻を受け、城下の会津盆地は凄惨な戦場と化して血の海で染まることになった。そして130年の時を超えた現在でもなお、会津人はこの戦争に拘り続けているのである⁽²⁾。なぜ会津人はそれほどまでに「拘り続ける」のであろうか。

今回は、会津戦争の象徴ともいえる、会津藩のために奮戦し殉難した少年白虎隊士の埋葬に焦点を当て、新たな資料を提示しながら再検討してみたいと思う。なお、会津では自軍を東軍、対する新政府軍を「官軍」ではなく西軍と呼んでいるので、以下、この呼称に従うことにする。

2. 少年白虎隊士の出陣と自刃

現在の東北本線にほぼ沿って北進した西軍の主力部隊は、白河・二本松を落として会津盆地の東北部から若松めがけて侵入した。その勢力は薩摩・長州・土佐・大垣・大村らの各藩兵3000名の大軍であった。そして慶応4年(1868)8月23日(陽暦10月6日)の早朝、西軍は一挙に若松城下になだれ込む。あいにく東軍の主力部隊は越後や日光・白河方面に出払っていたため、不意を突かれた城下は大混乱に陥り、歴史に残る数々の惨劇が展開されることになった⁽³⁾。「会津藩老西郷頼母一族二十一人の自刃」や女白虎隊といわれる「娘子軍の奮戦」なども、「少年白虎隊士の悲劇」とともに並び称せられるものである。このように藩士は勿論のこと、少年や老人・婦女子に至るまで東軍は捨て身の徹底抗戦を展開したのである。この日だけでも、東軍戦死者は460余名、藩士家族の殉難者は230余名にのぼったという⁽⁴⁾。

ところで会津藩では藩士を年齢別に分けて部隊を編成していた。つまり玄武隊(50歳以上、予備隊)、青龍隊(36~49歳、封境守備隊)、朱雀隊(18~35歳、実戦機動部隊)、白虎隊(16~17歳、予備隊)がそれで、これに砲兵隊や遊撃隊等を加えた約3000名で正規軍が編成された(東軍の全兵力は7000名であった)。このうち白虎隊は士中(上級武士の子弟)一番隊・二番隊、寄合(中級武士の子弟)一番隊・二番隊、それに足軽隊に分けられ、白虎隊士の数は343名であったという⁽⁵⁾。本稿での主人公は、このなかの士中二番隊(以下、二番隊とする)である。

西軍が城下に侵入する前日の8月22日、二番隊37名にも隊長^{ひなた ないき}日向内記(42歳、700石)の名で緊急登城の命が下り、藩主松平容保が滝沢村の本陣(鶴ヶ城からは東北の西軍侵入路にあたる)に出陣するのにともない、二番隊はその護衛の任にあたることになった。容保が本陣に入ると、二番隊は降りしきる雨のなかをさらに前進し、滝沢峠を越えて^{こわしみず}強清水に至り、夕刻には最前線の戸ノ口原に到着し西軍と対戦することになった。白虎隊士にとっての初めての戦闘は、西軍との銃撃戦であったという。この戸ノ口原で西軍を阻止できるかどうか、勝敗の鍵であった。しかし西軍の圧倒的な兵力と火器を

前にして、東軍は撤退を余儀なくされる。時は8月22日から23日にかけてのことであった⁽⁶⁾。

この最前線にあって、日向隊長は食糧調達のために部隊を離れたが、そのまま行方不明となってしまったため、嚮導の篠田儀三郎（17歳）が部隊の指揮をとることになった。二番隊は暴風雨のなかをいくつかの集団に分かれ、鶴ヶ城めざして敗走したという。篠田らの一団は飯盛山（標高372メートル）裏の不動の滝から北側ルートを経て滝沢本陣付近に出るが、そこで西軍と遭遇し一斉射撃を受け、隊士の永瀬雄治（16歳）が負傷する。したがって敵弾を避けるために当時から農業用水路として利用していた弁天洞門をくぐり、横山家（滝沢本陣）墓地付近の、飯盛山中腹の南面に至るのである。そこで隊士17名が目にしたものは、紅蓮の炎に包まれた城下であり、今にも焼け落ちるかのように黒煙に包まれた鶴ヶ城であった。この惨状を目の当たりにした隊士は、実に落胆し、悄然として佇んだという⁽⁷⁾。

実はこの時、城はまだ落ちていなかったのであるが、空腹と疲労と絶望感に襲われていた隊士たちに、もはや戦意は沸き上がってはこなかったと想像できる。そこで一同はこの地を最期の地と定め、遙に鶴ヶ城を眺めながら皆従容として自刃した。お互いに刺し違える者が多かったという（後に飯沼貞吉〔16歳〕だけが奇蹟的に蘇生する）。またこの17名の他に負傷した隊士3名も飯盛山にたどり着き、同じく自刃したという。

こうして飯沼を除く二番隊の少年19名が潔く自刃して果てたことになる。一方、この集団とは別行動であった残りの二番隊士10余名や行方不明であった日向隊長らは、鶴ヶ城に至り籠城することになる⁽⁸⁾。



白虎隊士自刃の地（飯盛山）

3. 少年白虎隊士埋葬の経緯

東軍の決死の応戦にもかかわらず、やがて頼みとしていた奥羽越列藩同盟も瓦解して、会津藩は孤立無援となり、遂に鶴ヶ城追手門に白旗が掲げられて東軍は降伏した。西軍が城下に侵入してから1ヶ月後の9月22日のことであつた。血みどろの戦いは東軍の惨敗という形で幕が降りたのである。城中には5000名前後の藩士らが籠城していたが、その3割は病人や老幼婦女子であつたという⁽⁹⁾。落城の翌日、城中の兵士は米沢藩兵に護られて猪苗代に謹慎し、500余名の病人・負傷者は城内の治療所を青木村に移して治療させ、老幼婦女子は塩川・喜多方方面に立ち退かせ、城外にあつて降伏した兵士1700余名は塩川に謹慎を命じられた。また藩主の松平容保・喜徳父子は滝沢本陣近くの妙国寺にて謹慎となつたが、翌10月には東京に送られて幽閉の身となつた。しかし東軍戦死者3000名の屍体は、「賊軍」の汚名のもとに西軍当局からその埋葬を固く禁じられていた⁽¹⁰⁾。

さて、この東軍戦死者の埋葬に関して尽力することになる会津藩士町野^{もと}主水（元越後小出島奉行、320石）は、後に「明治戊辰殉難者之霊奉祀ノ由来」（高橋磐美速記。以下、「奉祀ノ由来」とする）を残しているが、それには次のようにある⁽¹¹⁾。

時ニ官命ハ彼我ノ戦死者一切ニ対シテ決シテ何等ノ処置モ為ス可カラズ、若シ之レヲ敢テ為ス者アラバ嚴罰スト云フニテアリキ。サレバ誰アリテ之ガ埋葬ヲナス者ナク、屍体ハ皆狐狸鳶鳥ノ意ニ任セ、或ハ腐敗スルノ惨状ヲ極メザル可ラザルナリ（以下史料、傍点筆者）

東軍戦死者の遺体は、風雨に晒され、鳥獣野犬等の餌食となり、腐敗するに任されていたのである。これに対して、西軍軍務局が置かれていた城下の融通寺（浄土宗、現会津若松市大町）境内には西軍墓地が設けられ、早くも開城の翌月、つまり明治元年10月には大垣藩が「大垣戦死二十人墓」を建設したのを機に、西軍諸藩の墓碑建設が開始された。西軍戦死者は300名弱と

いわれているが、そのうち174名が埋葬されることになる同墓地の靈域門の燈籠の刻文（原漢文）には、次のようにある⁽¹²⁾。

明治元年の春、奥羽北越諸侯王命に抗して天皇赫怒して太宰師、兵部卿二親王に命じて勤王諸侯の師を率いて之を討つ。兵部王北陸自り、有栖川王は東海より往きて匪徒を平らげ、秋九月両道の師は会津に会して、若松城を囲み攻戦して日有り遂に平定の功を奏し、而して戦没者もまた少なからず。屍を此土に葬り、石を建てて大要を記し、後世に忠義の勇の若人有るを知らしむるは、是奨励之意也。

明治二年歲次己巳四月建

軍務判官事試補若松城戊守

三宮耕庵源義胤撰

安房長尾藩士熊沢薫書

これによると、西軍墓地は明治2年4月には整備されたことがわかる。若松城戊守三宮耕庵（近江善所藩士。また一説に岡山藩士とも）とは、東軍戦死者の埋葬に関して町野らと深く関わりをもつことになる人物である。戊辰3回忌にあたる翌3年4月に長州藩が「長藩戦死十五人墓」を建立したことで、西軍雄藩（薩長土肥）の墓碑が揃い、同年9月には同墓地で若松県知事四条隆平（公家出身）の主催による西軍戦死者の大法要（招魂祭）が開催されている⁽¹³⁾。

全国各地の西軍戦死者3588名を祀る東京招魂社（第1回合祀。後の靖国神



「大垣戦死二十人墓」（西軍墓地）

社)が創建されたのが明治2年6月であったが、同年7月には兵部省は同社の祭典を定め、例大祭を正月3日(伏見戦争記念日)、5月15日(上野戦争記念日)、5月18日(箱館降伏日)、それに9月22日(会津降伏日)の年4回とした。そして同社最初の例大祭が同2年



西軍墓地

9月21日に開催されているので(会津降伏日の22日が前年制定の天長節に当たったため一日繰り上げて行われ、以後は9月23日を例大祭とした)⁽¹⁴⁾、翌年の西軍墓地での既述の招魂祭も東京招魂社の例大祭を受けてのことと推測できる。

一方、本陣のあった滝沢村の肝煎吉田伊惣次は、自刃した白虎隊士の遺体の惨状を見かねて、その屍体を密かに埋葬したとされているが、実際にはその妻左喜によってなされたものであるらしい。伊惣次の曾孫にあたる吉田赴夫の「白虎隊士私葬記」から抜粋してみよう⁽¹⁵⁾。

私の生家は飯盛山の傍らの部落にある。今は会津若松市一箕町に編入されている。飯盛山で死んだ白虎隊士を最初に発見したのは、私の曾祖父吉田伊惣次利貞である———ということになっている。ほんとうのところは、私の曾祖母(左喜)であったそうである。その頃村の庄屋であった私の曾祖父は、会津軍の後方部隊の使役に駆り出されたか何かで、白河口の方に出ていて留守していた訳である。それが帰宅する間もなく西軍(私たち会津人は官軍とはいわない)が会津に突入した。私の曾祖父達の帰宅前の留守中に、白虎隊士らの自殺があったのである。村の人達が気付くまでに二、三日鳥の群れが喧しく鳴いて、飯盛山の上に騒いでいたようである。

村の人達の報らせて
行ってみた曾祖母は、
その無惨さに眼をお
おったであろうが、し
かし、死んでいる者達
がいずれも自分の子
(私の祖父)と同じ年
頃十五、六才のもの達
であるのをみては、感
動もし、憐憫の情に堪
えられなかったのであ



白虎隊士仮埋葬地（妙国寺）

ろう。信心深かったという曾祖母は、すぐにそれらを自家の墓地に葬って
やろうと思ったらしい。(中略) 会津開城後、時の軍監中村半次郎の命に
より、この件で曾祖父(曾祖母ではなく)吉田伊惣次は投獄された。

左喜は人夫を何人が雇い、夜間数回にわたって白虎隊士の遺体を飯盛山から
2キロ離れた自家の菩提寺である、当時無住であった妙国寺(日蓮宗、現
会津若松市一箕町八幡)に埋葬した。ここは既述したように、谷保・喜徳の
謹慎所でもあった。運ばれた遺体は4体とされているが、正確なところはわ
からない。また妙国寺だけではなく飯盛山にも埋葬されたともいわれている
が、その数も明らかではない⁽¹⁶⁾。

ところが、これが西軍黒羽藩兵の知るところとなって、左喜に代わって伊
惣次が捕らえられたのである。しかし、その行為が会津藩士の命によらず、
彼らの自主的な判断によってなされたことが判明したため、既述の中村軍監
は伊惣次を釈放したという。その釈放に関しては伊惣次宅に謹慎していた町
野の力添えがあったとされ、町野は中村軍監を話のわかる武士として評価し
ていたという。この中村とは、後の陸軍少将桐野利秋(薩摩藩士)のことで、
明治10年の丁丑戦役では西郷隆盛を補佐し、「賊軍」として城山で戦死する
ことになる。埋葬された白虎隊士の遺体は、しかしながら西軍によって再び

掘り起こされ、野に投棄された。時に明治元年12月頃のことであったという⁽¹⁷⁾。「奉祀ノ由来」に再び曰く⁽¹⁸⁾。

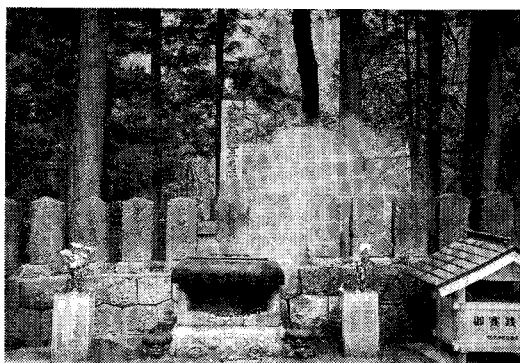
此ニ於テ身ハ仮令監禁謹慎中ニ在リト雖モ、義ニ富メル会津武士トシテ
戦友殉死者幾千ノ屍ヲ空シク山野ニサラスニ忍ビズ、且ツ是レモト忠君愛
國ノ本義ニ基キ而カモ君國ノ為ニ白骨ヲ晒スニ至リタル者、如何ニカシテ
此ノ惨状ヲ救済セントノ義心禁ズル能ハズ

そこで、取締（会津藩の戦後処理に関して西軍より任命された役職）の町野や高津仲三郎（350石）らの会津藩士は、元家老原田対馬（800石）らと相談し、融通寺の西軍軍務局へ出向いて白虎隊士の埋葬許可を嘆願した。十数度に及ぶ交渉の末、既述の三宮参謀は白虎隊士に限りその埋葬を許可した。ただし埋葬は黙認という形であったため、その作業は深夜の内に行われたという⁽¹⁹⁾。同じく町野の「白虎隊十九士埋葬ニ関スル件」（石川寅次郎筆記）には次のようにある⁽²⁰⁾。

然ラバ村民ノ好意ニヨリテ埋葬スルコトノミハ強イテ願ハレタレバ、隊長ノ三ノ宮氏ハ其ノ誠意ニ感ジ、其儀当ニ黙許スベシ、而シテ若シ官軍之ヲトガムルコトアラバ余ハ屠腹シテ罪ヲ謝センノミ、以テ諸君ノ義心ヲ立テント、遂ニ最後ノ決心ヲ以テ黙許セラルルコトナリ。之ヲ村民ニ計リタルニ民、前日ノ事ニ恐怖ヲ生ジ敢テ応ズルモノナシ。氏等此ニ於テ百方前日ト異ナル所ヲ説カレシニ村民漸ク其ノ意ヲ了シタルモ、尚前日四名ノミナリシニ係ワラズ、十余円ノ入費アリタレバ、況ンヤ今回ノ事、金ナクシテハ応ジ難シトノコトナレバ、一旦帰宿、四十余名ノ同志ニ計ラレタルニ孰レモ監禁ノ身トテ些ノ貯ノアルベキ様ニモナク、各自囊底ヲ叩キテ合計シ三十三円ヲ得テカトシ、村民ニ入費ヲ問ヘバ十五円ニテ足ルコト大イニ喜ビ金ヲ渡シテ埋葬ノコトヲ依頼シタルニ、場所ハ先ニ刀ノツカ袋ノ落チテアリシ所、縁深ケレバ其ノ処トセントノコト故、私ニ之ヲ検セシニ如何ニモ適当ノ所ナリシニ以テ其ノ地ヲ墓所ト定メテ埋葬セシメラレタルモノ

即チ今ノ飯盛山ノ霊地
タリト

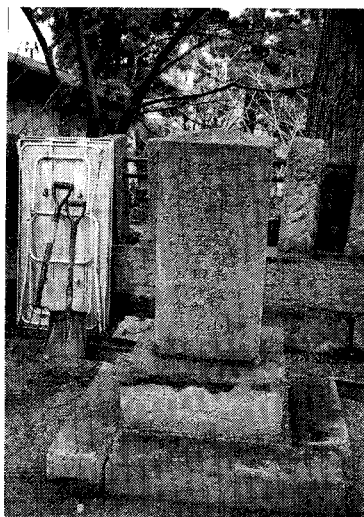
こうして漸く、三宮参謀の心を動かすことができた町野らは、白虎隊士の遺体を飯盛山に埋葬することができた。しかし、他の東軍戦死者の夥しい数の屍体は、依然として山野に放置されたままであった。



白虎隊士墓地（飯盛山）

4. むすび

以上、少年白虎隊士の埋葬の件について検討してみたが、これからも明らかなように、西軍当局は東軍戦死者の埋葬・祭祀に関して極めて冷酷な態度で臨んでいる。東軍の慰霊活動を認めることは反乱に繋がるという危惧があったと思われるが、それゆえ「賊軍」は死後の世界においても徹底して「賊軍」のレッテルを貼られることになり、東軍戦死者とて国事殉難者



「(吉田伊惣次) 篤志碑」(飯盛山)

でありながら、以後、国家による祭祀の対象（靖国神社）からは除外されることになった。冒頭で紹介した「会津人の拘り」もここにあったのであり、この差別化は明治新政府の意図するところであって、現在の「靖国問題」の

本質に関わる問題となっている。

「ならぬことはならぬもの」と教えた会津藩の教育（藩校は日新館）が高い水準にあったことで、「白虎隊士の悲劇」が生まれたともいえるが、白虎隊士以外の東軍戦死者3000名が「罪人」として、落城後、約半年後にその埋葬を許可されるためにはなお多くの曲折が必要であった。この点についての詳細はまた別稿に譲ることとしたい。

〈注〉

- (1) 森岡清美・今井昭彦「国事殉難戦没者、とくに反政府軍戦死者の慰霊実態（調査報告）」（『成城文藝』第102号、成城大学文芸学部、1982年）や今井「戊辰会津戦役における戦死者の処理と慰霊活動について」（『社会科学研究集録』第30号、埼玉県高等学校社会科教育研究会、1994年）、また初期会津戦争に関しては今井「越後小出戊辰戦役における戦死者祭祀」（『常民文化』第20号、成城大学常民文化研究会、1997年）等を参照されたい。
- (2) 平成8年11月24日付の朝日新聞には、山口県萩市の市長が会津若松市の市長を非公式に訪問した記事が掲載されている。この際、萩市長が若松市長に握手（和解）を求めたところ、若松市長は、まだ深い傷は癒えていないとして握手を拒否したという。
- (3) 森岡・今井、前掲報告書、4頁。
- (4) 会津史談会編『会津戦争のすべて』新人物往来社、1981年、68頁。
- (5) 星亮一『会津白虎隊』成美堂出版、1992年、13頁。佐々木克『戊辰戦争』中公新書、1981年、83～84頁。
- (6) 会津史談会編、前掲書、108～109頁。NHK取材班『堂々日本史3』KTC中央出版、1997年、216～217頁。
- (7) 会津史談会編、前掲書、110～111頁。NHK取材班、前掲書、230～231頁。
なお、8月22～23日にかけて、会津地方は台風に襲われたようで、この悪天候も二番隊にとっては負の要因となった。暴風雨は23日の午前8時頃には嘘のように止んでいたという（NHK取材班、前掲書、222～224頁）。
- (8) 会津史談会編、前掲書、110～112頁。飯沼貞吉は短刀で喉を突き人事不省で

倒れていたところを、足輕印出新蔵の妻ハツに発見されて助けられる（会津史談会編、前掲書、111頁）。貞吉が生き残ったことで、後世に「白虎隊士の悲劇」は語り伝えられることになるのだが、近年、実はもう一人の二番隊生存者が確認されている。酒井峰治という人物がそれで、自刃した集団とは別に単独行動で城内にたどり着き、戦後は北海道に移住している。仏壇にしまわれていた酒井の私記が、その子孫（北海道旭川市）によって平成5年秋に発見された。詳細はNHK取材班、前掲書を参照されたい。

- (9) 会津史談会編、前掲書、135頁。
- (10) 豊田武監修『会津の歴史』講談社、1973年、259頁。会津史談会編、前掲書、31頁。森岡・今井、前掲報告書、7頁。
- (11) 宮崎十三八編『会津戊辰戦争資料集』新人物往来社、1991年、287頁。
- (12) 中村昌道編『西軍墳墓志』会津戊辰戦役西軍墳墓史跡保存会、1978年、22頁。
なお、『西軍墳墓志』は下山忍氏（埼玉県立宮代高等学校教諭）から頂戴したもので、同氏からはいろいろとご教示をいただいた。
- (13) 森岡・今井、前掲報告書、7頁。中村編、前掲書、21～23頁。
- (14) 高石史人編『「靖国」問題関連年表』永田文昌堂、1990年、13頁。村上重良『慰霊と招魂』岩波新書、1974年、56～57頁。
- (15) 渡辺春也『理由なき奥羽越戊辰戦争』敬文堂、1985年、157～160頁。
- (16) 渡辺、前掲書、158～159頁。森岡・今井、前掲報告書、7頁。
- (17) 渡辺、前掲書、160頁。森岡・今井、前掲報告書、7頁。
- (18) 宮崎編、前掲書、287頁。
- (19) 相田泰三編『斗南藩史・未定稿』鈴木清美、1971年、12頁。中島欣也『武士道残照』恒文社、1990年、162頁。森岡・今井、前掲報告書、7頁。
- (20) 相田編、前掲書、16頁。

(2000年5月15日脱稿、8月5日改稿)